



伊豆母迺美多麻
初篇
二

ホ 2
276
2



ホ 8



伊豆母廼美及麻二之卷

川北丹靈翁著授

芥木藤原元達 校定

アヤワの辨

^ア ^ヤ ^ワ ア ヤ ワ のみくぐりハいどもたふどきおどありあ
 りのふだまといきとくさちとのエツよそ天の精靈^{ミコ}
 りいそゆさそのきくぐりてまろづもろくくのの
 よのよひそいどあふらむのいきあり、^{クハ} ^{シク} ^ハ
ニ篇言美靈

卷
一

ハあはくても、語の意と辨へて訓よハ、あはのづらう、語の
 切らうとらハ、せらうも、あり、さて、この、三行ハ、
 この、ことよ、うらうとよ、する、も、うらう、ハ、口、誣、よ、かた
 り、な、ば、や、く、ら、は、ま、う、た、り、た、り、と、愚、ある、筆、よ、は、つ
 く、く、だ、ら、じ、あ、く、ハ、な、う、と、あ、く、辨、へ、た、ら、し、を、漢
 キ、ジ、リ、よ、う、づ、り、た、る、中、よ、て、生、育、ち、た、る、人、ハ、あ、の、づ、ら
 よ、ハ、ハ、ら、ま、ま、う、ら、う、に、あ、り、わ、ざ、ら、り、か、い、こ、れ、と、よ、く、こ、ご
 ろ、さ、し、と、あ、あ、あ、あ、あ、う、う、ハ、あ、の、く、吾、い、ま、の、音、を、
 くら、め、と、ら、で、ら、ま、ま、へ、あ、ら、べ、

アヤワカサの五行 水兒の義

天ハ、瀉、基、水、あり、地ハ、其、漢、の、あ、づ、ま、り、く、ら、う、た、る、なり、
 故、五、十、音、も、清、濁、分、ち、ぞ、サ、の、く、ら、う、り、よ、り、以、上、二、十、五
 音、ハ、清、音、よ、て、天、の、い、ぢ、あ、り、タ、の、く、だ、り、よ、り、以、下、二
 十、五、音、ハ、清、音、あり、ども、あ、の、づ、ら、う、濁、ら、と、あ、く、ん、て
 則、地、の、い、ぢ、あ、り、又、五、十、音、の、中、ハ、濁、り、音、曇、り、音、の、二
 十、五、音、合、せ、て、七、十、五、音、あり、此、外、こ、と、か、ら、の、活、用、鼻、音、
 音、便、の、事、ハ、三、の、卷、と、見、て、あ、る、べ、し、故、よ、ア、ヤ、ワ、の、三
 ぐ、だ、り、ハ、濁、り、音、あり、ガ、サ、の、二、く、だ、り、ハ、濁、り、音、あ
 り、と、も、た、く、語、ハ、活、用、差、別、ハ、濁、り、の、こ、と、よ、て、ま、ご、と、の、
 濁、り、音、よ、わ、く、ま、た、ど、へ、ハ、雲、霧、霞、ハ、空、の、く、り、た、る、

ぐらとぐら晴るわぶたらちあまらうこそなる一又ナの
 くぐらマのくぐらハ濁る音ありふ他たわらもえよ
 り濁りたる音よて故ナニヌ子ノハダチツデトの濁
 音と同音又マミムメモハバセブベボとおあ一おど
 めるともてえより濁りおどめるところをわらべ一又
 ラリルレロハハこぞよ重き音よて語のそ一めよなき
 るもても濁り音あることずる一むきよ上の五行り
 ハ清音よて天水あり下ノの五くぐらハ土よぶくある
 水あり

アヤヤのくぐらハ天のいざあまをすてよいづるが

こと一むきよアヤハ天の氣吹よて汝の満テし海
 の西カかくのこくぐらたつとわやとりあり
 アヤのくぐらハ天の體ありことよをよいづるが
 とぐぞの天のうたらハすあまら海水よてうみハ地
 と圍りて其形ち輪とわやまらあまらハダとりふ又
 アハハ泡よてそのうららわち子子輪ありむきよ水
 よ物の落入たることふかあまら粒だつりくくのこく
 泡とあやり古事記よ沫那藝神沫那美神次キよ頼那
 藝神頼那美神とあまらあまら水の沫と粒だつるとよ
 ろうたる号よてわらわらそのうたらつづハそのおどあり

の始よて、もろもろ根あり故湯水ハ、鴻基よて、天地の
 祖あり、すれバ、力のくごりハ、三くごりのつぎある理
 りあり、又アカハ、天水よて、船よ水の入たるを、塗と云
 そわを汲捨る器と、屏斗といふ、梵語よ、阿伽陀、阿伽
 といふ、アカハ語の似たりたるのよて、皇國の語よ
 ハ、あゝずぞろー

アサハ、浅あり、流水よて、アセといふと、あゝ又
 人の層より、涌きあうも、アセといふ、そのあせ
 のとごり、けりたるハ、あゝも、アカあり、そを服細を
 かけて、蒸し、陽の氣と含り、たらし、あゝ、武化生り、下

あゝよ、アカハ、虫魚の種ありと、あゝ

或人云、アヤワの三くごりハ、古人の口よハ、あゝあ
 ら、分りて、そのあせを、あゝ書、あゝあゝあゝ
 下、今世の人の口よハ、そのけぢり、あゝあゝあゝあゝ
 下、よ、書ともことハ、是りあゝを、教て、あゝあゝあゝ
 するハ、いづら、あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
 つけら、あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
 あゝあゝの傳へた、あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ
 則、天地の命あり、故よ、大皇國の教諭ハ、言靈の外よ
 ろ、あゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝあゝ

らおのれが、いさめこのころよぎげもりさる、天地のな
 さどしあり、故それよ、きたうふハ人倫のふりあり、
 そわよせたりもぎるハ、天地の命よそいくよ、あを
 しそらざる人ハせのすへあり、おりてふたりよを
 るハあもあしぎいごとあり、故又天地の命よせたり
 ふとぎハ字と書假字とふきこくくハ、それよあり、
 たふらぎあり、柳言皇靈の備へ、ふしけはハ、あを
 ら心もふしく、天の下、根よして君と君と惶んて礼
 ることあり、是テニヨハの調のありあり、テニヨ
 ハとハ、五十連音の、カタキテの、カタキテハ、経緯終始よて、カタキテの、カタキテハ、カタキテハ、
カタキテの、カタキテハ、カタキテハ、
カタキテの、カタキテハ、カタキテハ、

ヨハリノ省文ハハハハ
音ノ五段十行終始ハハハハ
ヨヨリテマデノ座居ナリ
 此調のありハ、則天地の備へよて、天下の法あり、
 ねど、今の事とありて、以来、や、國意よ、疎くあり、
 是延喜天曆のころの、一轉あり、いよ、五十連音
 の道とや、忘れ假字と、後、國字と、誤りたるハ、
 各の手の、みなたれ、るあり、故保元平治のころよ、い
 たりてハ、天の下の、テニヨハ、乱し、父子兄弟の愛と、
 忘れ、大日本の風俗、爰よ、頹敗たるも、五十連音の、
 ふだれ、る、由るよ、人倫と、もよ、頹れたるあり、され
 ば、五十音の、位と、ん、び、りて、アカサタナハ、マヤラワ

と居替たりしものころのさくらら、まゝいあふべし
くるよ慶長元和のころより天の下、猶治り國風上
古よまうへりの時いづれもや、元禄の比もや
難波の阿闍梨契沖ある者、紀記万葉集あるよ、心と
つぐ—上古の假字遣ひと考へ上件よもいづるこ
とに國字のことをも見用子、舊事よもや、あつ
ちいりしと思ふ人々もつぎ、世よ生れぬて
古言を覓假字遣ひとあつまぐりする人、心起り
たれば月々年々よ世の間いよ、治り人の心も
おのづから正し方よづづりぬて上を惶とん下

と憐れなにもお皇國の上古心よ、おのしぎし、言皇
靈の幸あつたれ、つたよ、せし—あそわりくるよ、又
音の間、なれ、福津日神の荒びと、こりたるよ、
音とハ人の心も音も、なれ—のよ、語の目、とす
よ假字ありて、國字よも書くよ、あつた、ん、
ハ、セ、い、ら、べ、あ、—又天の下、治り君臣のそあへ、
く皇國魂よ、まうへりの、と、ま、あ、—あ、れ、
假字も真言の音よ、あ、ハ、本、意、あ、—
を假字よ、ら、ら、し、よ、宿、い、居、の、
醉、ろ、ひ、老、ハ、お、の、甥、ハ、と、
大坂、ハ、お、不、さ、ら、逢坂、ハ、

あふさう。あふさうを老うとひ。甥うあひ大坂うあふさう。
逢坂うあふさう。あふさうと書て、見い入のうぐ心符
へぎや、是よてもみだりよりうそへ、さうのうぐのハ
ざう、さうとあふさうべー、古今榮雅抄よ、うぐたりの
あふさうあふさうあふさうの依保のめをさう
くすらいとひつる舟の、後よすを棹よみあし
たりと、語したるハ、假字と辨へざる人のみたりこ
なり、棹ハ佐表なるとや

アイロイヌ又一音の語あり、辨

アのくだりの義上より、うぐ、うぐ、うぐ、天の精靈のう

うぐたらあ、あ、一音めてハ、語とあさず、一音めて語

よ用ゆる、射眠寢膽五宿五十馬声ハ義訓ニテ蜂音ヲ

タクヒニテ是等ハ文字ノ意ニハ、拘ハラズ、只伊ト云

假字ニ用フルノミカノ五十ノ二字ヲ伊ニ用ユルハ

伊豆母之美、友麻ニ篇言、柯柄江枝善吉、胞菴櫻得可愛

皇靈ノ件ニ云ヲ見ベシ、郡名ノミ蓋又和名抄ニ云ハ

ナル五十馬声ノ例ナリ、又類娃ノ二字ヲエノ一言ニ

用ヒタルハ、薩摩ノ国ノ郡名ノミ蓋又和名抄ニ云ハ

トア等の訓ハ、さへて、の行のレエなり、亦居井猪

藺座處體、亥、亥、率、十馬声ノ例也、鴉卯、兔得、画繪、餅、咲

小尾、宇、緒、絃、麻、男、夫、雄、岡、丘、岑、峯、侵、壯、士、丁、矣、等、の、訓、ハ

皆レの行の、斗、ウ、エ、ヲ、なり、その證ハ、矢、屋、八、彌、谷、哉

又、輪、廻、丸、等、の、一、言、の、語、ハ、あ、れ、ど、ア、と、い、ふ、一、言、の、語

かな | 古事記中卷倭建命ノ御言葉ニ阿豆麻波夜ト
 詔給ヒシ吾妻ハアレカツマハヤトイフヲ約
 メタル言アレカノ言ヲ切テ又同上卷須勢理昆
 賣ノ歌ニ阿波母與賣途所阿禮婆ヌストアル吾ハアレ
 ハモヨノレウ省ルニテ元ヨリ一言ニハアラシ又大
 教の詞ニ畔放トアルアセノ畧ナリ又先達ノ説
 程々アレヒタシカナラズ田ノ境ヲアトバカリニ
 テハ阿エズアト云ハ水ノ義ニテゼハ塞ノ畧ナリ其
 ヨシ委クハ大枝詞考釋論ニイユリ見合ヌ又世代四
 ベシイヅレニモアトイフ一言ノ語ハナシ又
 夜男尾草緒等の一言之語ハあれど、**オ**といふ一言の
 語ハ初一是もても一言の語のレウエハアのくだり
 の音よあゝあゝと、着明しべー

ア行の工の辨

言皇靈の活用ハ五十字なれども、アのくゞりの工ハ

是てのうとをなす唯兄の言よの工用也と
 もそれも兄弟あゝとてぶとぎよの工といひて
 兄ぐりりと、いふとぎよハアニア子又イロ子セといひ
 て、工といふとぎ、故詞よ活用ハ四十九音ありそハ深
 ずもるゝあることあるべし、其義ハ能考へ
 ざれども、この五十連音ハ先ツリアと第三の音ぐり
 第一の音と誘ひ起し、セウにて、アイリ工又と連
 聲と、次第するあり、其第三の音ハ第一と第五の
 音と、第二の音ハ第四の音と、三つて、第四ハ生
 めく音の始あり、そハ三の卷の相通の條よ、いふと

見てゑるべし。按古事記、伊邪那岐伊邪那美二柱の神
 始て、あはれもをる。御子水蛭子の神と不良とをとりて、
 御子の例よ入りずとあり、こゝの二段の音より始て
 生る。上の音の言の例よ入らざるも、うの蛭子の故
 事よ能くうなるべし。せうれども、蛭子の傳ハ異ある
 よて、神代参考、終よ委曲し、り見て考ふべし。又歌
 の五字七字よ音の餘れるハ其一句の中よ、アの行の
 音の加ふる例、右本居始メテアイリス、字哥ノ中ニテ
字アマリニナルノ説アリ味セ知ルベシ
 あり、然るよ、いづれの古哥よも、アイリスの音の加
 らる。上の音の入りて、餘る哥ハ見えず、同じ音よても。

ヤの行の行の、ハ別あり、猶例と引て、精ぐ云べし
 ○古今歌集の中よ、字餘哥、二百三十二首、其中よ、二字
 餘の哥、二十九首、アのくぐりよ、非を、て、餘る哥、
 二十二首あり、其中、ア、イ、リ、オの字餘、左のこゝろ

有
 アリ 二十八
 アル 十五
 アレ 十三
 アラ 二十四
 種
 アカ 又ニ
 アケ 又ニ
 アモ 又ニ
 アサ 又ニ
 アキト 一
 アクト 一
 アヘズ 八
 アハム 一
 アハノ 二
 合 二十三

出
 イデ 十四
 イヅ 六
 イヅル 六
 合 二十云
 イフ 三
 イヘ 五
 イハ 二
 種
 イハニ 一
 イナバ 一
 イリテ 一
 イタミ 一
 池 一
 色 九
 命 一
 合 十六

種マ 内四 植三 海一
上四 中二 浦一
リスミ一 合十六

思 合五十二 合十六

オモヒ	二十三	オツル	二	オゼノ	一
オモフ	二十五	オキテ	五	オモミ	一
オモム	三	オハバ	一	オホセ	一
オモハス	一	オゲル	一	オフル	一
		オモニ	二	オセニケリ	一

このぐのこごとく、五七言は餘りある句数二百四十六句あり又
 アイアオの外同集は餘りある哥二十二首余もあはれバ
 あらうららるる一六いひりくたれど一ざ格よハ
 わらじ又アの行の字あまりよもあたやうなるぞも
 彼は見ゆれば見ゆる人心を用ひてよださハアのこごとく

の字あまりよもなるらよあますハらる一況や外の
 字あまりハあるたげあまさるぞよき猶歌なるび
 文章のよと字どしとほりあるともぐらハ其及の
 先達よとてあべ一 字餘リト字省ノ委事ハ石上足
 曳ノ卷ニ云フヲ見テシルベシ
 字餘りの句のうらよもアの行あらむとてその格よ
 透くも彼は見ゆあまハヤの行のハワのこごとりの
 りよて漢字ハ色命糸往又植等あり是等の哥も前よ
 云ふことごとく句あまりの格あらねどそのあまらる一
 句の中よあはれバ定て貫之のころもぞアのこごとりの
 イらとてとらる一あらむ故あなるらよらる一とハ

いそねと正しき格ありねハ能^{ヨク}カ^クして知るべし又古歌の
 中よらみあはるるよ心えべき哥ありたるとハ水^ミの西よ
 ちつく花の色さやうよも思^{おも}うみうけのおもふゆる
 うか。是等^ナの哥ハ五七の調^マようたひてハ調^マとこわうて
 ころし上の句と九言十言と句と切とハ調^マべし其^シ餘^カ
 このたぐひの哥押て知るべし又哥よアイ^イイ^イオ^オの字あ
 まりのるハ契^キ沖^チ本^ホ居^クとらこのうた哥詠^カのどのよし
 たらつとらよ説^セ著^トたる書^シ彼^カ是^シ見^ミおれハ其^シ例^レと今
 更^シいふよおよそぞろんども初^ハ学^クの心得^コよ古^コ今^イ集^シとら
 例^レと奉^ルる左^サのこどし

アの字餘り哥三首

ささやとまきこらなやあそきとささわらむ
 うらてしすたよもあうすもあふこのま
 のよらうのこふあひのめりいつてらんよ
 いまいこらありてわうあつらんてむ
 なつとあそきとあそいふさうのうよあひらハ
 うらとらうとさうややかくらむ
 イの字餘り哥二首
 手みうたつらとらよのよいでさあつむ
 わうとらもてりあそいりあつむ

ちるせうねあまうわななくわきそいそび
おもひのころそせもつありけき

月の字餘り哥二首

さしのおらよらるはまよらうてそそを
らそとやいとむびこらそとやいとむび
ららのそとやいとむびこらそとやいとむび
こらそとやいとむびこらそとやいとむび

刀の字餘り哥二首

とらそとやいとむびこらそとやいとむび
ららのそとやいとむびこらそとやいとむび
こらそとやいとむびこらそとやいとむび
ららのそとやいとむびこらそとやいとむび

なうらてはいもせのやまのあうりあつる

とらそとやいとむびこらそとやいとむび

のこのころぐアの行の字あま一て詠べ一又五句と
もよあまのし哥もあわ能字ひて詠むべ一又アの
くさりの外の字あま一古人の例あわどもんざり
よ詠はるる一能く字ひる一と一はとよらうくも梅又
本居春庭が詞八街よ得ル得ルと言の通ひと一てア
の行のり一と一ひ一ハ得の字よ惑ひて言の義とと
りちうへたるならむ古史ハ文字よのそ、依うてハ誤
るる妻一の石の字とレシよよ一レワよも用い又

法ヲカス。女男ヲカスと共ニ、アヒ花の字と用ひたる類ひあり。是等ハいとマキ後人の惑ひるゝてカキヅラ手書法あり。抑ウハ物と獲るゝとてワの行のウなり。エハ心よ得るゝてヤの行のエあり。精きとハ伊豆母之美。女麻ニ編よ云へり。一言よて語とある。ウエハ物。惣てヤの行ワの行の音あり。況てエハ。二言三言の語よても皆ヤの行よてアの行のエの詞よある。上の句あまりの哥よても、コ知るべし。猶いそとて撰ハエル。俗よ。ヨルと云ふ。ことよて善の意あり。蝦夷ハユミシヒトミト通フオドの轉言よてエゾハ其略則チ師の意ろあり。

蝦夷人ハ常ニ山歎海魚ヲテト又エヒ籠ハ弓の具ルヲ業トスル國ノナラシトイフ。又エヒ籠ハ弓の具よて。ユミラの轉語又エヒ籠、其形シヲシ弓よ似たるとて。是もユミとエヒと括カたる号あり。又可愛の二字とエと訓ハ善吉の義訓よてニハアラズ。又枝胞ハエの一言グ本よて古事記上卷よ上枝中枝下枝とあり。又書紀よ、以淡路洲為胞とあり。同一書ハ先以淡路洲為胞とあり。又枝ハ今世も松マツ枝梅ウメ枝エなとあり。ナを役エ疫ハ、役エ立疫病タチの立病と省ハて役又疫の一字とエダテエヤミと言とてよあり。蓋此等ハ元より皇國の語よあり。漢字よあり。い

だ、しつとぞうよて、縁とエニシ但縁ハ本四ニ也エニシト云フシハ言ヲ強メスナリといふハ、蘭とラニカといふ類よてエの意別なり。是等の類語、まきまのれ見ゆる人が、てゑるべし。

アイリスの四ツの音ハ語の中下

よてハ、おのつりり者うる辨

アアの行ハ、よいふことごとく、天の精霊よて清く軽く、殊よ五十連音の天祖よていとまたふとよ、天然うら語の中下よ、あゝあゝ、若よ、語と重ぬるとよ、ハ省り、う或ハ他の音よ代る五段ノ横通格ありたど同韻テ代ルハ、五十嵐とイカラシ本阿彌とホシナミ字音ノ語ニテモ皇

國ノ語ニシテ唱フル時、娶とメヤハス、五條邊とワタリ、春雨とハルサス、呉藍とタレナ斗、冬丸とカモフリ、彌生とヤヨヒ、寄合とヨリヤヒ、有明とアリヤケと、唱あゝ類ひ、おゝてゑるべし、亦退ぞく、ハ、河内とカハチ、播磨郡明石とアカシ高砂と、タカサゴ、甲乙とエト、神名帳和泉高石神社と、タカシ、但馬郡出石と、イツシ、備中郷大石と、オホシ、備後郡神石と、カメシ、出雲郡飯石と、イヒシ、上総郷埴石と、ハニシ、豊後郡直入と、ナホリ、出羽郷山縣と、ヤマカタ寺あり、あゝて、ア、イと省く、と、ゑるべし、ウと省くも、上のこと、古事記上巻

水^{スミ}鍛^カ人^ナ天津^ツ麻^マ羅^ラとあり、舊事紀は天津麻浦とて天
津麻良とも書たれども訓ハ古事記のこしくマラと
よむべし又相^ア樂^ラ念^ネ者^{シヤ}と書てもアヘラクモヘハと訓
又宇^ウ都^ツ曾^ソ臣^シ跡^トと書てもウツソミとくみ又古事記よ
八^ヤ比^ヒ之^シ白^ヒ日^コ子^ノ王^ミとてヤツリノ云とよむ類ひ舊事紀
古事記日本紀万葉集等よ、かきりもなくわれはぐく
考へてヤとよむべし又肥前郡松浦とマツラ長門郡豊
浦とトヨラ尾張郷鳴海とナルミ遠江郷老馬とオレ
マ安房郷益海とシ小三上野郷飽馬とアキマ信濃郷
麻績とヲミ安波郡勝浦とカツラ能登郷大海とオ小三

越^{コシ}後^シ郷^ノ青^ア海^ラとアヲミ因幡郡古海とフルミ又能登郷
日^ヒ置^{オキ}とヒキ若狭郷玉置とタマキ等あり又馬ハハ
なれども上^ウノ語^{コト}と重^カねて早馬青馬足毛馬とあり
ハハヤマアヲママシケマとりと看うて喝ふる格也
七のれとも辞と隔て早馬白馬足毛の馬とあり
ハハマといひ又黒馬班馬とありハクロゴマブチゴ
マと喝ふるべしゴマハ男馬なり古萬と子馬とすハ
駒の字よ付たる説もて哥ありよ詠らまよ叶えず和
名抄よ馬^ハ無^ム萬^{マン}驛^イ馬^バハ子^シム^ム馬^バ駿^{セン}馬^バハブ^ブ子^シム^ム
駿馬^ヲトキムマ、あどあるハ、とりよ、誤りありた

語の下よてもムマといふハ詠りあり衣馬の説なら
び其精事ハ余が著大枝詞考釋論云へり見合を
べ―此外アイリオと言葉の中下よと云ふ事又加
へりもまゝ事万葉集と古今集等の哥と見て悟るべ
―哥ハ長雨とナカメと詠る事のちくともせり
能古哥とだ―て知るべ―

古今集春の下よ

小野小町

そゝのいろはうつりよけりあいたつこよ
のうみよふるあがせしまのけり

同集巻の三 在系業平朝臣

あきもせすねもせてよとく〜とく
そゝのいろはうつりよけりあいたつこよ
そゝたらしてわらみふくねるなごあよハ
ひとのこゝろつらそゝあもらうけり
こゝ外あまたあもあうあめとよいこゝろあ―然る
よ後の世の人こゝろその中下よアイリオと省くるハ
ソロ―久忘れそなたととも哥よハあいつうそをぶ
うもくハ言靈の幸ふ國の御惠のつぎぞとあうか
たなり又同集春の上よ
のへらうくいろの―せねはうくそよあ

なぐさるるころこハハ。わさ。あや。いな。さく

この哥もよへハハ。わさ。あよ。みて。下ハ。わと。ころ。さ。て。
 さな。と。よ。ひ。べ。一。万。葉。十。一。又。朝。名。且。名。と。か。け。る。と。同。
 二十。よ。阿。佐。奈。佐。奈。と。假。字。又。か。け。り。上。ハ。漢。字。の。ま。く。
 又。書。下。ハ。詞。の。い。ひ。さ。ま。と。あ。く。せ。て。書。た。る。よ。ま。て。漢。字。
 よ。う。け。る。も。假。字。書。の。こ。ろ。く。わ。と。さ。ふ。そ。あ。さ。あ。さ。
 め。と。こ。ひ。べ。一。五。め。じ。の。時。ハ。わ。さ。な。わ。さ。あ。と。字。あ。
 ま。り。よ。よ。み。て。も。誤。り。と。い。ふ。よ。ハ。わ。さ。な。ぞ。ろ。一。猶。此。
 類。又。一。見。る。もの。心。と。用。ゆ。べ。一。其。中。又。白。石。ミラレシ 陸奥ノ石大。
 内。裏。唐。詩。あ。ど。ハ。省。り。も。代。り。も。せ。て。其。ま。く。又。唱。あ。る。

ぐ。こ。ろ。く。な。れ。ど。こ。ハ。う。あ。く。ず。ヤ。の。行。の。上。ハ。口。の。行。の。
 ウ。よ。轉。り。た。る。あ。り。ア。の。行。と。其。音。同。一。け。せ。ば。其。差。別。
 め。一。と。お。も。ふ。人。あ。る。べ。く。れ。ど。も。寄。合。と。ヨ。リ。ヤ。ヒ。彌。
 生。と。ヤ。ヨ。ヒ。と。代。る。と。も。て。是。も。ヤ。口。の。行。の。少。ゆ。あ。る。
 こ。ろ。と。あ。る。べ。一。又。音。鬼。赤。鬼。羽。織。あ。と。よ。オ。と。書。ハ。誤。
 り。な。り。
或説ニ鬼ハ如魄鬼ノ字ヲオニト訓スルハ
 今ノ京ニ遷都ノ後隠ノ字ノ音ヲ取テ國語
 ノ如ク唱ヘシナリトイヘリ然ラバ其以前ハオニト
 云フ号ハナシ又羽織ハ伊勢氏ノ秋草ニ羽織ト書ハ
 詞ニツキテアデ字ニ書タルナリ實ハハフリ書テ詞
 ニハハナリト云フナリアフヒト書テアオヒト云ヒ
 アフダト書テ詞ニハアオグト云ト同例ナリハフリ
 ハ放ノ字ニテハナルノ意源氏若紫ノ卷ニ心ニマカ
 セテハフラカシ亦赤石ノ卷ニカクナガラ身ヲハバ
 ラカシツルニヤ云是等ミナ放ノ字ナリタトヘバ

ツナキタルモノハナルヤウノ事ヲハフラカス
 ハフルト云フナリ俗語ニハフリナゲルハフリカケ
 ルナド云フモ同シ詞ナリ羽織ハ帯ヲセズシテハフ
 リカケテ着ルユハフリト云フヲ詞ニツキテアデ
 字ニ書タルナリトイヘリ此説キコエタレドモ疾ク
 羽織^ウ字ヲ書來レバ今改メテハフリト書トモ誰カ
 ツレニ依ル人モアルマシケレ是等ノ誤リ又依リテ
 バ今書ママニ羽織ニテ置ベシ
 正^イ國字^{クニ}つくひなる^カ假字^カ又惑ふ^{マド}ことなる^カれ
 と正しく書くよハ鬼織とぞかりハオニオリとオの
 字と書キ赤鬼青鬼羽織とよ語と重ねたる時ハア
 カヲニアラヲミハヨリとオの字と書くべし^{ナホ}橋^{ハカ}外^ノ
 らとぞも^カら^カよ^カあ^カぞ^カく^カて國字^{クニ}の^カ用格^{ヨウカク}と^カあ^カる^カべし
 アイ^イリ^リオ^オの^ノ四音^{ヨウオン}ハ上^ノよ^ク云^フふ^クこ^トく^ク語^ゴの中^ノ下^ノよ^ク唱^フふ

ることあり^イハえより詞^{コト}とあ^カら^カね^カば^カこ^トぞ^カよ^クあ^カふ
 るハ惣^{ソウ}て^イヤ^ノの^ノ行^{ユク}の^ノエ^ノも^カよ^ク語^ゴの^ノ下^ノよ^クても^カあ^カら^カず^カ
 あ^カら^カね^カら^カよ^クても^カア^ノの^ノく^クだ^カりの^ノエ^ノハ^ノこ^トぞ^カよ^ク用^カひ
 ざ^カら^カ一^カツ^カの^ノ證^シと^カあ^カる^カべし

ヤウの二行の辞の活用

貴人^{タウトキヒト}者^ハ位^イ高^{カク}く^カた^カふ^カも^カよ^ク支^カ體^{タイ}と^カ動^カう^カず^カして^カ心^{ココロ}と
 配^カり^カ卑^ヒき^カ者^ハハ^カ心^{ココロ}と^カ苦^クら^カず^カして^カ體^{タイ}と^カ働^カく^カこ^トと^カ天^{テン}然^{ゼン}の^ノ
 理^リり^カよ^クして^カ天^{テン}ハ^ノ地^チと^カ覆^フひ^カて^カ萬^{マン}つ^カの^ノ物^{モノ}の^ノ種^{タネ}あ^カれ^カども
 其^{ナリ}造^{ソウ}化^カ物^{モノ}と^カ體^{タイ}よ^ク受^ウけ^カて^カ産^{ウチ}育^{イク}て^カ繁^{ハネ}雜^ザハ^ノ地^チあ^カり^カぬ^カる^カよ
 貴人^{タウトキヒト}ハ^ノ支^カ體^{タイ}ハ^ノ安^{ヤス}く^カ穩^{ウチ}あ^カれ^カども^カ心^{ココロ}ハ^ノ其^{ナリ}身^ミ閨^ニ室^{シツ}の内^ノよ

わりといつても、心のやまもさうある一奴僕ハ心ハ
 安くして支體と働くと暇あり又支體よていそぐ
 頭ハ上よりわけて貴き由きよ物ハ作らねども目よ視
 耳よ聴て萬の事よ心と配り手足ハ其勞ハなかくて安
 きよ似せども、筋骨と苦碎ハ手足なり又金銀ハ其状
 麗しく自り威光よ由きよ状態ハ働かずして万物
 と融通ハ金銀あり銅鐵ハ其態ともて事と足らず大
 切あり故アの行ハ列聲の上よりわけてたふとも音の
 色辞よ活用うずヤの行ウの行ハ是よ亞ぐ音よてカ
 サタナハマラの七くごりよ、拜ぶとハ辞の活用少

由きよ三段よ、たつとて其用格も異なり次きの七
 くだりと、

第三 第四 第五
 眼前 過去 未至

越	コ	ユ	コ	ユ	コ	ユ
肥	コ	ユ	コ	ユ	コ	ユ
絶	タ	ユ	タ	エ	タ	ヨ
増	フ	ユ	フ	エ	フ	ヨ
居	ス	ウ	ス	エ	ス	ヨ
殖	リ	ウ	リ	エ	リ	ヨ

拜せし位の甲乙と知るべし、その中にも、ラの行ハ、こ
 ども、辞の活用おのづから此とらるるを、くわらるるを、ひら
 べし

カサタナハマラ七行の辞の活用

書	カ	サ	タ	ナ	ハ
刺	キ	シ	チ	ニ	ヒ
立	ク	ス	ツ	ヌ	フ
死	ケ	セ	テ	子	へ
問	ユ	ソ	ト	ノ	小

○ 極マル 又事未定 定ムル 命スル 發心 又息定

吞	マ	ミ	ム	メ	モ
足	ラ	リ	ル	レ	ロ

此のこゝろ、四段は、活用くハ、たゞ、ハ、上の二く、たりハ、
 皇別、下の七行ハ、神別、よ、等、一、又、豎、十行の中、ア、ヤ、ワ、
 の、三、く、たりハ、天の位なり、横五段、よ、て、ハ、第一、段、が、天
 の位あるもろ、神別、よ、ても、辞の活用あり、然、れ、とも、下
 七行ハ、第一、段、の音も、下、よ、ム、ヌ、の音と、添、ふ、と、バ、カ、カ、ム
 サ、サ、ム、あ、る、も、ろ、と、く、又、活用あり、ヤ、ワ、ハ、此、活用あり、も、
 皇別の位あるもろあり、此、ヤ、ワ、ハ、肥、コ、ヤ、居、ス、ワ、ム
 など、も、た、ら、る、く、ハ、サ、の、行、テ、の、行、の、活用、よ、て、コ、ヤ、タ、ヤ、

スワのヤワハ三之卷又云聲色とユワレ口、爲肥と、ユ
ヤシとワハ、片通變格の例あり、即第四段と第一段と
の、逆通ひの條と、辨せて知るべし

○言皇靈ハ、大八洲國のミの音、あらず、天地の御氣
よして、世界萬國の備あり、故又窮理文國ど、ソレども、
その窮理も、文も、音なくして、ハ、理と知るも、事ごとを制
するも、かゝるべし、況て、言皇靈の、幸行ふ國の大
道ハ、此息音の、備よして、是敷、嵩の王道あり、抑大皇國ハ、
天地の初發氣化の人、喰物ハ、木の實、草の根と、採りて
喰ひ着る物ハ、薦菅あると、身は纏ひ、窟は雨露と、凌ぎ、

調度ハ、貝、骨、木、の葉、竹の皮、あごと、用ひ、別は物と
作る事、も、なご、萬づの、ゆ、皆、天地の成の、まよ、まよ、足ら
し、つ、経、了、ら、む、論、と、また、ず、故、何、事、も、い、と、事、を
く、あ、な、り、ん、と、バ、言、葉、も、あ、く、し、て、つ、も、と、一、言、よ、し、て、
足、ろ、し、も、漸、形、化、入、の、マ、と、あり、日、日、月、月、年、年、よ、人
の子、多、く、其、胤、種、蕃、息、榮、え、て、土、と、燒、き、て、器、と、鐵、と
掘、て、斧、と、作、り、木、と、伐、り、草、と、蒔、る、よ、至、る、ま、て、萬、づ、も
ろ、く、事、繁、く、あ、る、ま、よ、く、二、言、三、言、と、物、よ、り、事
は、隨、ひ、て、誰、名、づ、く、も、な、く、か、く、も、な、く、い、ひ、た
せ、ハ、言、靈、の、幸、あり、す、れ、バ、年、よ、月、よ、萬、づ、の、ゆ、因、は、

取り調のひて、夜食住の道も定り、此大皇國は天照皇
太神降誕坐す、一々、一々、炊爨織縫の業も起り、萬物
足らぬ、ことあり、調ひて、五十連音の、もたらし、物も
つき、事は、隨ひて、其差別と定め、ことごと、の通ひ通え、
るの道筋も、八千岐よ、ら、り、事、も、足ら、せ、ら、ら、
かく、て、また、世遠く、や、運り、運り、て、支國國の事等を
も、貢奉せ、ば、い、よ、く、事繁ぐ、成行、況て、其邦國の人々
十、之、教、受、參、來り、て、こ、ご、ご、と、音も、言葉とも、打交り
て、根、あり、草の、茂り、浮草の、浮た、る、こ、ご、ご、と、も、遣ひ
蔓、い、て、高き、卑し、きの、境も、あり、言葉の本末と、忘し、世

の中の、テニヲハ、い、つ、と、あり、ら、る、ら、る、ら、る、ら、る、
彼の、保え、平治の、ら、る、ら、る、と、あり、夫、ら、り、以、從、四、百、餘、年
ら、間、又、真言と、い、う、ら、な、む、朝廷、は、叛、き、亦、親族、或、ハ、争、ひ
或、ハ、殺、し、夫、ら、り、續、き、て、我、ひ、此、事、あり、即、ち、此、時、ら、り、
吾皇國の王道も、乱、れ、言靈の、備へ、も、頼、敗、た、る、成、べ、し、
故、よ、その、こ、ご、ご、と、り、五十連音の、列位と、錯、簡、り、國字と
假字の、用、格、とも、錯、れ、る、こ、ご、ご、と、を、是、と、以、て、知、る、べ、し、
然、る、よ、慶長、元和の、頃、又、至り、て、大皇國、朝廷の、徳、運
上古、又、復、一、再、ひ、天下、泰、平、は、治り、上、と、と、と、一、君、臣の
備へ、上古の、國風、も、立、歸り、彼の、頼、せ、た、る、言語、國字

と假字の用格と云ふに書別心と欲りしる人々漸
生れぬに天の下のテニヨハ調ひたりと云ふに
ぞありりるされば言皇靈ハ敷寫の神の御諭一天皇
國の王道よて天地の命なり故五十連音の列位ハ君
臣父子の備よて其禮義嚴重あるを始よ著圖解と見
て知るべし是ぞ身と脩り國と治るの根えあり然る
世の人言靈と云ふ名ハ知りて口よりとも言靈ハ
天の命よして吾皇國の大道身と脩るの教ぞといふ
ことを説たる人いまださうざれば其事伊豆母之美
琴麻二編言皇靈之條よ云ふと見てよ然れども其連

音のあらしきことよいづべし先大日本國の王道と以て
さふる左のこと
○アヤワの三行ハ天地の大元言靈の大祖あれば皇
國の大王と皇子のこと一次の七行ハ臣よて其位
其官職夫々の差別ありて國務と始萬のものと主宰て
治りたること
○カノ行ハ位高く衣食住の事と掌りていざつて重
子職あり
○サタナノ三つりハ夫々のありまあり先づ々
のくくりハ大地の體よて中央よ位して萬物と育つる

事と掌り。サハ其大地の表。位一水と掌り。萬物を養
の職あり。ナハ其大地の裏。位一て。洲壤を固り。亦食
國々食國ハと治の職なり

○ハの行ハ事と發し。又起るの息よて。萬物の開發所
謂火の氣あり。其火の氣ハ天地と循環し。濁る時ハ地
中ハ凝清時ハ天よ升。千言萬語と云く。その音あり。故
よ語の中下よてハ天の體あり。ワウエヲの音と化
り又バビブベボと濁る時ハ地の息あり。マミムメモ
の音よ化るあり。さねバハの行ハ天地開闢の元よて
其職ハさね一其位ハ低くト

○マの行ハ天の憲と請受けて。うと蒸結ひ生産を
掌りて人の女昧のこころ。故よ大地の息よて。萬物
の母なり。さねバハと重る職あり。その音濁るとめて
位ハ卑し。濁るハ水のわらま。あねバなり

○ラの行ハ音殊よ重く賤し。音よて語の意は閑
ま。あねよ一音よて用ひることなる。亦語の上よ立
ま。語の中下よの。活用よて。たとひも。奴僕のことし
他の音よ。使へて。其語のよと。さねすこと。士民よ等し
く。大功あること。他のこと。りよ。ま。さ。る。り。方。さ。ね。バ
五十連の音の備へハ天の下の備よて。アのふたりハ

申も惶し皇子より大臣國造とありて下万民に至るまで此五十らの音よことごとく其意備せりたゞむに上ありて下恭く又臣ありて政事と執りたまひ民ありて調貢と奉り或ハ役立よ仕へ又士ありて國を治り農人ありて耕作し工職ありて家を作し諸の器と作り商人ありて萬物と融通し又馬飼船頭海士山賤皆夫々事と立しむるごとく五十らの音又濁するに十五の音何と云一音阙ても事足らぬハ天地の備へたるありかく言皇靈の性質とめて人事とたゞて又王道よたゞいひて知るありるごとく天地の間よ

あるとわらゆるもの草木と鳥獸虫魚何れもこの恵の恩頼と蒙るるものなごらむ故よ士農工商百家の業よ至るまで言皇靈の法則よもごらむ其職マとがえり人考へて其業を行ふ時ハわやまらるるのみならずべし何事も私智とめし専ら頼とよむるときハたとひ功と得るといへども災害の至るるもなごらむべし不精するハ後よ者よ條と見て知るべし

伊豆母煙美尋麻二之卷

二
卷

三
八

